

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

假名草子集

下

野田壽雄（のだひさを）

大正二年大阪府生。昭和十年東京大學國文學科卒業。北海道大學教授。主著―平賀源内の人と生涯、西鶴、近松、近世小説史論考、近世文學の背景、兩月物語全釋等。

日本古典全書

「假名草子集」下 野田壽雄校註

昭和三十七年七月十月初版發行

昭和四十九年三月三十日第五刷發行

印刷所 株式會社精興社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮

定價 八〇〇圓

目次

解 說	三
竹 齋	三
東海道名所記	二
仁勢物語	元
參考文獻	三
凡 例	二五
本 文	二七
竹 齋	二七
上	元
下	毛
目 次	一

目次

二

東海道名所記 八

一 江戸より大磯まで 全

二 小田原より江尻まで 二四

三 府中より吉田まで 一五

四 御油より庄野まで 一七

五 龜山より山科まで 二六

六 山科より京まはり宇治まで 二七

仁勢物語 二八

上 二五

下 三三

假名草子集

下

野
田
壽
雄

解 説

假名草子の一般的な解説は、「假名草子集上」ですでに述べたので、この「假名草子集下」では、ここに収載した三つの作品、すなはち「竹齋」「東海道名所記」「仁勢物語」の個々についての作品解説にとどめたい。

竹 齋

假名草子の初期の作品として有名な作品である。「竹齋」といふのは、作中の主人公の名が竹齋といふのから取つたもので、ちやうど「恨の介」の書名が同書の主人公恨の介から來てゐるのと同じである。京都のやぶ醫者の竹齋が、貧乏に堪えかねて、にらみの介といふ郎黨を連れて諸國遍歴を思ひ立つ。先づ京都の東山の名所を見物してのち、北野神社に參詣したが、そこで大勢の人々がさまさまの事をして遊んでゐる光景を見る。女の車に戀文をさし入れる人や、連歌の座敷、若者の蹴鞠、小歌の席、能の會、双六、香、相撲などの遊びの様子を見る。また若い女房に對する勿體ぶつた法師の説教、讀書會をしてゐる若衆、そ

の若衆の一人に長い戀文を贈る田舎の男、さういふ光景を見たり聞いたりする。かくて二人は京都を離れ、東海道を江戸へ向つて下るのであるが、途中名古屋に滞在し、「天下一やぶくすし竹齋」といふ看板を出して商賣をはじめ。ぼつぼつと患者もあらはれたが、最初に頼まれたのが日射病の男であつた。(以上上巻)しかしその治療はでたため、古疊をかぶせたりする。そのほか鐵屑が眼に入つた患者に磁石を用ゐたり、落馬をした男に「寢よ寢よ」と責めたり、梅毒患者にいか物の藥を與へたり、熱病患者に茄子の香の物を食はせたり、青梅を咽喉につまらせた女房の口に吸膏藥を張りつけたり、子どもが井戸に落ちたのに、また吸膏藥を使つて效目がなかつたり、いろいろ滑稽な治療をする。名古屋には三年ゐたが、ここも厭になつて、また東海道を下つてゆく。江戸に着いて、江戸の見物をし、「くれ竹のすぐなる代々にあひぬればやぶくすしまでたのもしきかな」の一首を詠んで終る。(以上下巻)

以上がこの作の主な筋であるが、これを見てもわかるように主人公竹齋の遍歴の小説であり、滑稽の小説である。しかし遍歴といつても主人公がただ方々を放浪するといふのではなく、京都や東海道また江戸の名所の見聞をするといふのが本意で、遍歴小説といふよりは見聞記といつた方がよいかも知れない。この小説が有名になつて、假名草子の中に京都や東海道の名所案内記が流行し出したといふのも無理はない。東海道についての紀行文は、古くは平安朝時代の「更級日記」をはじめ、鎌倉時代の「十六夜日記」「海道記」「東關紀行」などがあり、見聞記では室町時代の「廻國雜記」などあるが、これらはすべて隨筆

のたぐひで、「竹齋」のやうに小説に採入れたものではない。「竹齋」がこれらの紀行文から暗示を得たであらうことは推測されるが、本質的にはこれらのものとは全然異なるものである。特に上巻で京都の名所案内から、長々しい北野神社での當世風俗の描寫をおこなつたことは、これが單なる紀行文や案内記の氣分からではなくて、むしろ近世といふ新時代に對處して、當世風俗に興味を持ち、その紹介をする氣分からおこなつたと見るのが至當である。

いはゆる江戸時代は、徳川幕府の成立（慶長八年—一六〇三年）以來世の中が安定し、平和氣分が横溢した。文運も次第に隆盛におもむいたが、同時に一般に享樂氣分も瀰漫したのだつた。京都見物をはじめ、方々の名所見物がさかんになつたのも、東海道の上り下りがさかんになつたのも、江戸時代になつてからの新現象であるといつてよい。特に東海道は、京都大坂と江戸とをつなぐ交通の要路として注目を浴びるやうになり、一生に一度は江戸に出かけねばならない人も多くなつて來たのであるから、その東海道を描いた作品が興味を持たれるやうになつたのも、ごく自然の勢ひであつたのである。「竹齋」はいちはやくこの流行に着目し、京都や東海道や江戸の名所記を書いたわけで、最初の作品であるから統一的でなく散漫なものではあつたけれども、流行に乗つたお蔭で注目され拍手をもつて迎へられたのであつた。

がそれと同時に、この作品は一つの滑稽小説であつた。やぶ醫者であるから竹齋といふ名をかしく、その主人公が道中時々滑稽なことをする。竹齋の滑稽ばかりでなく、京都の風俗描寫の中にも、連歌・蹴

鞠の滑稽や法師の滑稽などがあつて、全體にユーモラスな氣分が漂つてゐる。そしてそれを助長するものは、作中に豊富に挿入された狂歌である。作者はおそらく狂歌の達人であつたと思はれるが、その狂歌の挿入によつて、この作の滑稽的氣分は確かに増加してゐる。場合によると、この作は一つの狂歌咄^{ばなし}ではなかつたかと思はれる程である。竹齋といふ滑稽な主人公を設定して、をかしな所作をさせ、また狂歌を詠ませるといふ筋立ては、どこから來たものかわからないけれども、作者が狂歌をたしなんである内の思ひつきであつたかも知れず、また作者の諷刺か自嘲であつたかも知れない。しかしとにかく成功してゐる。後世これが名所記や遍歴小説あるいは滑稽小説の一つの典型となり、すべて「竹齋」に従ふものが多かつたといふのも、この發案が非常におもしろかつたからであると思ふ。竹齋が後世飄々乎とした人物の代表者のやうになり、松尾芭蕉の「狂句木枯の身は竹齋に似たるかな」の句にも詠まれるに至つては、この發案まさに天馬空を行くの概のあるものであつた。

この作、作者も成立年代も不明である。作者については、中村富平の「辨疑書目録」(寶永七年刊)の中に「烏丸光廣公書作」として「竹齋二卷」が擧げられ、それより烏丸光廣(天正七年—寛永十五年)の作とされてゐるが、なほ疑はしいこともある。もつとも烏丸光廣は慶長・元和年間に度々江戸へ下り、「あづまの道の記」(元和四年六月)といった紀行文も書いてゐるのであるから、東海道には詳しいと考へられ、また細川幽齋の愛弟子で和歌や狂歌を良くしたことも、「竹齋」の狂歌の要素と思ひ合せて、この作の作者

に擬するの尤もと考へられる。あるいは、傳説的ではあるが、その身權大納言正二位の高位にありながら、京都の遊女と歌のやりとりをしたり、慶長十四年の宮廷姦淫事件に連座して勅勘を蒙つたり、その他かなり自由人の風貌が傳へられてゐるのであるから、「竹齋」のやうな滑稽小説も執筆したのではないかと考へるのも、無理はないやうに思はれる。しかし、だからと云つてはつきり光廣作とも斷定できないのである。殊に下巻では、醫道に詳しい人でなければ書けないやうな部分もあるから、すぐ彼の作とも判定しかねる。なにか名古屋と關係のある醫者の作ではないかと思ふ。

次に、この作の成立年代であるが、この作には後に述べるやうに古活字本二種があるので、近世もごく初期の成立であつたことは想像されるが、その點をもう少し内容の面から追求してみることしよう。先づ「竹齋」の冒頭に

あめがしたおだやかにして、山もだうぜず。みねの松たいらかにして、風しづかにおさまり、國家よろこびながき時とかや。

とあつて、文中の「國家よろこびながき時」といふのが、「慶長」といふ年號を暗示するとすれば、この作は慶長年中に成立したと云へさうである。ところが、さらに進むと、竹齋たちが京都の豊國神社に參詣する場面に、

それよりとよ國大明神に參て、さきの關白ひで吉公の、御れいせきなり。今時うつり、世へんじて、

しやだうたいはにをよべり。

とあつて、社堂が大破してゐる状況が書かれ、これを推測するに、大坂の陣で豊臣氏が滅んだのが元和元年(一六一五年)五月で、そのあと豊國神社を破壊したのが同年七月であるから、この記事が書かれたのは少くも元和元年七月以後である。それからずっとあとになるが、竹齋が江戸に着いて江戸城を見物する。そのところに

おなじくるわの山つづき、木々はこずゑをならべつつ、松にこまつをうへそへて、しげるあひだのその中に、とのづくりしておはします、若君さまと聞えける。はばかりながらも一しゆ、よろこびのうたをゑいじける。

みどりたつ松にわかばのしげりそひちよをかさぬるためしなるらん

とあつて、ここに書かれてゐる若君が、歌に暗示されてゐるやうに竹千代であるとすれば、竹千代は徳川家光の幼名で、その元服は元和六年九月七日であるから、ここは元和六年以前といふことになる。もつとも松田修氏が「竹齋の成立」(國語國文昭和三十二年三月)の論考で云はれてゐるやうに、元服しても家光が元和九年六月將軍宣下まで若君といはれる可能性があるから、あるいは元和九年以前かも知れない。なほ松田氏は下巻の江戸の舟歌の中の「ありまのいづもさま」が有馬豊長であり、豊長が元和七年出雲守に任官してゐるところから、元和七年以後とされる。さうなると元和七年以後、九年以前といふことになる。

さらに別の事實を挙げると、

それよりもみぢ山に参りつつ、ごんげんさまをふしおがみ、あたりのけしきをうちながめ

といふ所があつて、紅葉山に家康を祀つた東照權現が出来たのが、元和四年四月十七日で、ここはそれ以後のこととなる。以上のやうないろいろな推定からして、この作の成立は元和四年から九年までであつて、巻頭の言のやうな慶長年間でないことだけは確かであらう。したがつて「竹齋」の古活字版も、元和末年に發刊された元和活字本である。

さうすると、慶長十四年ごろ成立した「恨の介」よりは、十年のちに書かれたものとすることができるが、確かに作中に「恨の介」から得たであらうと思はれる箇所も無いではない。たとへば竹齋に隨行するにらみの介といふ郎黨の名前は、うらみの介をもじつたものであつたらうし、また京都見物に、ある男が美少年に贈つた長い戀文が挿入されてゐるが、その戀文が長歌形式を採つてゐるのも、「恨の介」の雪の前に贈る長歌形式の戀文をまねたものであつたらう。そのほか京都の名所案内や東海道の名所案内も、「恨の介」の中に三味線の胴の蒔繪の説明として出てくる道行文にヒントを得たかも知れず、歌謠の採入も「恨の介」の發想に動かされたかも知れない。考へればいくらでもあらう。だがこのやうに影響がかなりあるからといつて、「竹齋」が「恨の介」の模倣であるとは決していへない。何となれば、「恨の介」も新しい作品ではあるがやはり中世風の傳統的戀愛小説をまねがれないのに對して、「竹齋」はさういふ

戀愛小説ではなく、構成その他がすべて違ふからである。「竹齋」の根源は、前にも述べたやうにあくまでも遍歴小説、滑稽小説であつて、中世風な傳統的小説とはむしろ對立するものである。「恨の介」の評に動かされて、執筆が促がされたのかも知れないが、發想は作者の滑稽や、あるいは自嘲、あるいは見聞の中に生まれ、それだけに、「恨の介」とはちがつた次元において獨特の創造がなされたと見るべきであると思ふ。

「竹齋」の影響は大きく、この作自體がその後何遍も再版されて愛讀されたが、模倣作も多く出た。たとへばこの作が京都から江戸への下り竹齋であるのに對して「上り竹齋」(刊年不明)「竹齋狂歌物語」(正徳三年)といふ書があらはれ、また「新竹齋」(貞享四年)といふのもあらはれてゐる。また竹齋が醫者であつたことから、醫道の啓蒙をおこなはうとする「醫者鏡病人鑑竹齋療治之評判」(貞享二年)や、主人公の名を變へた「賢齋物語」(刊年不明)といふ書もあらはれた。「杉楊枝」(延寶八年)は、竹齋と一休和尚が行脚して滑稽をばらまく話を載せ、これも流行に追隨した滑稽小説であるといつていい。名所記といふ方では、「竹齋」が東海道を扱つてゐるところから「東海道名所記」(萬治二年)を起す原因となるが、一方見聞記といふ方では、「浮世物語」(刊年不明)のやうな世相見聞の書を生むことになつた。遠く後世に及ばせば、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」もこの作にヒントを得てゐるといふことができるであらう。

原本は古活字版である。現存するものに二種あり、一つは靜嘉堂文庫及び大東急記念文庫藏の十一行

本、一つはお茶の水圖書館蔵の十行本である。兩者の異同はさうひどくないが、後者には間々脱文があり、不完全な所がある。古活字版のあとに、寛永ごろ補修改訂をした整版が數多く出版され、これは方々の圖書館に現存してゐるから、閱覽するにはやさしい。整版では、文章も直してゐるが、大きな違ひは、上卷に黒谷で佐々木安女（うづめ）といふ美少年の死を慕つて腹を切らうとした播磨の男の話が、長々と挿入されてゐることである。しかしこの男色話は退屈であり、全く意味の無い挿入としか考へられない。

ここでは、靜嘉堂文庫の大本二冊、挿繪入りの十一行本を底本とした。整版本との比較は、最近古典文庫の一冊として出た朝倉治彦氏の「竹齋（對校本）」を参照されたい。

東海道名所記

「竹齋」の影響から作られたといふ「東海道名所記」は、果して「竹齋」とそれ程深い關係があるかといふと、必ずしもさう深い關係があるとも斷定できない。確かに江戸や東海道、あるいは京都などの名所案内があり、樂阿彌といふ主人公が大坂の手代と二人で狂歌を詠みつつ江戸から京都へ上つてゆくといふ構成などは、「竹齋」にヒントを得てゐるやうに思はれるが、その性質は全然異なるものである。「竹齋」は、前にも述べたやうに遍歴小説であり滑稽小説であつて、名所記といった實利的な目的を必ずしも持つてはゐないのだが、この「東海道名所記」は、はつきり名所記とうたつて東海道の精密正確な名所案内を

目的とし、旅行の興味をそそらうとしたものであつた。だから小説といふよりは、實利的な案内記といった方が正しいかも知れない。冒頭の

いとおしき子には旅をさせよといふ事あり。萬事思ひしるものは、旅にまざる事なし。鄙の永路を行過るには、物うき事、うれしき事、はらのたつこと、おもしろき事、あはれること、おそろしき事、あぶなき事、をかきこと、とりどりさまま也。

といった書き出しでもわかるやうに、明らかに旅行を讚美し、旅行を描く意圖のほかは何ものもない。全六冊すべて東海道の名所のくはしい紹介である。中に多少、樂阿彌の滑稽や土地の宿屋女・馬子・琵琶法師などの滑稽もあるが、全體にいつて滑稽小説といふ程のものではないのである。さういふ點で、この作はその創作動機において「竹齋」とは異なるものを持つてゐた。

「東海道名所記」の成立については、むしろ當時の名所記や道中記の流行に關係があると考へた方が現實的である。京都の名所記では、中川喜雲の「京わらんべ」(萬治元年)などが古いものであるが、東海道の「道中記」は、明暦元年、萬治二年と發行され、旅行者の便利をはかつてゐた。岸得藏氏が「道中記・丙辰紀行・東海道名所記」(静岡女子短期大學紀要第六號)の論文で、「東海道名所記」が「道中記」や林羅山の「丙辰紀行」(寛永十五年)と特に深い關係があり、その丸取りの部分のあることを指摘されたのは、大變有益で、この作の成立根據を考へる上に役に立つ。この作は、それらの書に刺戟され、また自分の見